とらわれの姫君

御崎ゆい

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
とらわれの姫君

【Ｎコード】
Ｎ９８３４Ｚ

【作者名】
御崎ゆい

【あらすじ】
麗奈は一年前、異世界の国ローランシアへやって来た。
そして、ようやく元の世界へ還ることができると思った矢先、変態王子と鬼畜宰相の妨害に遭い、それはあっけなく打ち砕かれる。
同時に、何故かその二人から麗奈は求婚されて……。
王子や宰相、そして彼女を還したくない人々によって、麗奈は今日も異世界にとらわれたまま。

1．異世界という名の鳥かご（1）

目の前には、わたしの両手をそれぞれ恭しくとり跪く、美の女神の祝福を受けたかのような麗しい青年が二人。

うっとり見上げる二対のその眼（まなこ）は、熱を帯びて妙に艶かしい。

握られる両の手のひらに、じわりと冷たい汗がにじむ。

一体、何がどうなって、こうなっているの！？

わたし、今頃は、約一年ぶりに再会した両親の腕の中で、嬉し泣きをしているはずなのに。当初の予定では。

それなのに、何がどうなって、二人の見目麗しい青年に求婚されているのでしょう？

＊

冴え渡るような冷たさを感じる無機質な白い空間。

けれど、そんな中でも、ただひとつだけ、生命力を感じるものがある。

ドーム型の天井いたるところにある明り取りの窓から、差し込む虹色を帯びた陽光。

それだけは、動と力強さを感じさせる。

たしか、ここは王宮内にある大神殿の、特別な時にだけ使用を許された広間だと言っていた。

わたしの足元には、幾重にも重ねられた幾何学模様を描く円が広がっている。

ただ、何故かその一部はこすられ溶け出たように欠落しているけれど。

その方陣のまわりは、火がついたろうそくをのせた燭台が囲んでいる。

けれど、うちひとつが倒れ、ろうそくの火が消えている。

その不完全な円の中心に、わたしは今立っている。
この円は、魔方陣とかいう、わたしの記憶では小説や漫画、映画の中にだけでてくる、奇天烈怪奇なものだと教えられた。
そして、何故だか、目の前には、清々しいまでのほがらかとした笑顔を浮かべる、むかつくくらい綺麗な顔の男が二人。
一人は、これまた物語の中にでもでてきそうな、金髪碧眼の王子。
一人は、やっぱり物語の中にでもでてきそうな、銀髪紫眼の宰相。
実際、金髪碧眼は、このローランシアとかいう訳がわからない国の王太子だと言っていたし、銀髪紫眼はその麗しい姿は妖精のようとうたわれる、自称ローランシアの美貌の若き宰相だと名乗った。
その絵に描いたような見た目だけは非の打ち所がない男が二人、それぞれわたしの両手を恭しく握っている。
しかも、跪いて、上目遣いにわたしを見上げながら。
「レイナ、私の妃になってくれるね」
わたしの右手をとりそう告げるのは、無邪気さを残したとろけるような微笑を向けるこの国の（変態）王太子、ランスロット・ジャスティン・バルフォア・ローランシア。
そして、わたしの左手をとり、果たして自分自身にか、それとも何かの気の迷いで間違ってわたしにか、うっとりと酔い、色気たっぷりに見つめる、この国の（鬼畜）宰相、エセルバート・ジェレマイア・ベイリアル。
「いえ、こんなぼんくら王子などより、私の方が断然お得です。私の妻になりなさい」
ほわほわっとした笑みを浮かべるランスロット――ランスの頬をぐにっと押しやり、当然のように言い放つエセルバート――エセル。
だから、何がどうなって、こうなっているの！？
そう、魔術師だとかいう、やっぱり非現実的な白髪黒ローブ姿の好々爺が奇妙な言葉をぶつぶつつぶやくことをやめたかと思うと、同時に二人は、先程から、この訳がわからない応酬を繰り返している。

ランスの「レイナ、愛している。結婚しよう」にはじまり、それに対抗するようにエセルの「あなたしか考えられない、私の妻になる女性は」が続き、ともにこの空間にいる、ただ一人蚊帳の外にされている魔術師があっけにとられるなか、だんだん声が大きくなり激化してきている。

……いい加減、うるさいし、うっとうしいのですけれど。

え？　もしかしてこれって、わたしがとめなきゃ、誰もとめる人がいないということ！？

「こんな鬼畜野郎などより、私の方がレイナを幸せにできる！」

「その程度の能力でですか？　無能王子が聞いて呆れますね。私がレイナを誰よりも愛し、誰よりも幸せにしましょう」

魔術師はもちろんだけれど、もはやわたしまでも放置して、二人はすっかり罵声という名の牽制に突入してしまった。

やっぱり、これって、わたしがとめないと駄目なのかなあ？

はあ、すごく面倒。

だって、この二人って……。

いやいや、それよりも何よりも、いちばん問題なのは、この二人がさっきから話題にしているとんでもないただひとつのことよね、やっぱり！

「ランス、エセル」

わたしの手をぎゅうぎゅう握ったまま言い争う二人の名を呼ぶ。

すると、二人は弾かれたように大きく体を震わせ、ゆっくりわたしを見上げてきた。

どうやら、わたしが結論を出し、先程の返事が告げられると思ったのだろう。

事実、告げるのだけれどね。このままじゃあ、埒が明かないから。

けれどきっと、それは二人が望むものではない。

ランスとエセル、二人としっかり視線を合わせ、きっぱり告げる。

「どちらも、丁重にお断りします」

同時に、右手を握るランスの手も、左手を握るエセルの手も乱暴

に振り払う。
　ランスは衝撃に打ち震えたように目を見開きわたしを見つめ、エセルは怪訝にわたしをにらみつける。
「なんだって！？」
「何故です！？」
「何故もへったくれもないでしょう！　今まさに、わたしは元の世界へ還ろうとしていたのだから！　それを邪魔して、何をしてくれちゃっているのよ、あなたたち二人は！　大迷惑なんですけれど！？」
　びしっと二人を指さし、きっぱり言い放つ。
　そう、まさしく今、わたしは魔術師が描いた魔方陣と呪文によって、この世界に来て約一年、長かった時を経て、ようやく元の世界に戻れるところだったのよ！
　それを邪魔したのは、ランスとエセルのこの二人！
　しかも、悪意たっぷりのくせに悪びれることなく、ひょうひょうとしてのけてくれたのよ！
　こんの悪魔どもが！！
「この馬鹿王子ならともかく、国一の美貌と頭脳を誇る、この私の求婚を退けるというのですか！？　馬鹿な！！」
「エセルバート、お前、自分で言っていて恥ずかしくないか？　というか、私は馬鹿ではない」
「事実ですから。そして、あなたは馬鹿です」
　激しい衝撃を受けたようにのけぞるエセルに、ランスが冷めた眼差しを向け、ぼそりつぶやく。
　すると、エセルはさらっとそんなことを続けて言ってのけた。
　さすがに、ランスもわたしも呆れすぎて、次の言葉がつげなくなった。いわゆる絶句。
　わかっていたけれど、とってもわかっていたけれど、そこで事実とか言っちゃう！？　まったく、この男は……っ。
　いやいやいや、だから、今はそんなことはどうでもいいの！

「とりあえず、二人とも黙れ！」
再びぎゃあぎゃあわめきはじめた二人を、ぴしゃりと一喝する。
すると、ランスもエセルも、不満そうにわたしを見つめ、ひとまずはそのうるさい口をとじた。
それにしても、この二人、本当に面倒くさい。
ランスは何かと理由をつけては必要以上に触れてくる変態で、エセルはにこにこ笑いながら無駄にそばにいざるを得ない状況を作る鬼畜。
二人とも、わたしが老若関係なく他の男の人と話すことを嫌がり、果ては人間にとどまらず、犬や猫、馬といった動物に至るまで、生物学上？オス？のものに触れることを嫌がる……。
それこそ、寝る時以外は、常に見える場所にわたしを置きたがるし、どうしてもそうできない時は、その間のことを事細かに報告させていると、仲良くなった騎士団長が言っていた。
しかも、最近は、その寝る時ですら、油断をすると一人になれないって、何の嫌がらせですか！？
彼らがその気になった時は、どんなに抵抗しても抱き枕にされるんですけれど！
どちらかではなく、どちらもの。
何やら二人の間で取り決めがあるらしく、わたしを抱き枕にする時は、わたしを真ん中にした川の字でなければならないらしい。絶対に三人で寝なければいけなくて、どちらか一方とでは駄目らしい。わたしと二人だけは言語道断らしい。
それに何の意味があるのか、まったくわからないけれど。
というか、わたしは人間であって、決して枕ではなーい！
何なの、この二人！
もう訳がわからないのですけれど！
そして、きわめつきは、これ。わたしの帰還の邪魔。
一体何がしたいのか、さっぱりわからない！
……いや、うん、週に一度はベッドに奇襲をかけられて、抱き枕

にされることに抵抗を感じなくなりつつあるわたしが、もっとさっぱりわからないのだけれど、……ね？

2．異世界という名の鳥かご（2）

――そう、はじまりは、今から一年ほど前。

大学に入学したての頃、オリエンテーションを終えて、桜が舞う坂を駅に向け下っていた時だった。

大学が小高い丘の上に建っていることも関係するのか、いきなり突風が吹き、わたしは花嵐に襲われた。

それをやり過ごすためにぎゅっと目を閉じ、そして風の気配を感じなくなった頃、恐る恐る目を開けた。

すると、次の瞬間わたしの目に飛び込んできたのは、真っ白の世界。

たしかに歩いていたはずの薄紅色の世界は、もうそこにはなかった。

どこか冷たさを感じる真っ白い世界で、目の前には驚きに目を見開く金髪碧眼の美貌の青年。

そして、その背後にはずらっと居並ぶ、見たこともない服装のいろいろな年代の男性たち。

ただ、壮年から老年の割合が高かったことを覚えている。

まさに今いるこの場所に、気づいた時わたしはいた。

それは、ちょうど、ランスの誕生日式典の儀式のひとつをここで行っている時だったらしい。

雪のように白く、虹色の光が行く筋も差し込む広間の中央で、儀礼にのっとりランスが祈りを捧げている時だった。

この空間に目がつぶれるほどの閃光がいきなりはしったかと思うと、目をあけた次には、虹色の光に包まれ、ふわりふわりとランスの腕の中にわたしが舞い降りてきたという。

そして、ランスの腕にしっかりとした重みを感じた時、閉じられていたわたしの目がうっすらとひらいた。

わたしはその時はじめて、ランスの腕の中、ランスを目にした。

息をのみ、戸惑うその場に集う人たちの中から、誰かがぽつりこぼした。
「て、天からの王子への祝福の証の娘……」
まるでそれが起爆剤となったかのように、瞬間広間は歓声に包まれた。
そして、気づけば、わたしはそのつぶやきの通り、天から贈られた娘――祝福の女神の娘に仕立て上げられていた。
けれど、その後すぐに通された無駄に豪華な客室で、ランスのお父様ローランシア国王パーシヴァル様、ランス、宰相であるエセルと話しているうちに、わたしは天から贈られた娘などではなく、何かの拍子に異世界から召喚されてしまったただの普通の娘と結論が導き出され、決着がついた。
ならば、呼ぶことができたのなら送り還すことも可能だろうということになり、では早速元の世界へ還して欲しいと言ったところ、すぐには無理だという返事。
どうやら、呼び出した者が誰かもわからない状況では、送り還すにはいろいろ調べなければいけないし準備も必要ということ。その期間が約一年だった。
恐らく呼び出したのはこの国の者だろうから、多大な迷惑をかけた詫びにと、元の世界へ戻るまでの衣食住を保障してくれた。
少し申し訳ない気持ちもあったけれど、あくまでわたしは被害者。それに、気にしていたらこの世界で生きていけない。
わたしはまず、一年という長い時間を生き抜かなければならない。話はそれからなのだから。そのためになら、多少図々しくもなる。
無理矢理自分にそう言い聞かせ、肩身の狭い思いをこの約一年耐えてきた。
途中何度も耐えられなくなり、元の世界に今すぐ還りたいと泣き喚いたこともある。
けれどそのたびに、ランスとエセルがはげましてくれて、どうにか一年を乗り切れた。

あちらとこちらでは季節のめぐりが少し違うのか、向こうではたしかに桜舞う春だったのに、やってきた時、こちらはさわやかな風が吹く初夏の頃だった。
それから季節はひとめぐりし、わたしがこの世界にやってきた時と同じ、初夏の頃を迎えた。
そうして、ランスの誕生日をすぐそこに控えた今日、ようやくその時がやってきた。
それなのに、誰よりもわたしが元の世界へ還ることを望んでいると知っている二人のはずなのに、その二人がそれを邪魔したなんて……！
何を血迷ったの！？
わたしが元の世界へ還るための儀式――送還の儀は、魔術師長である、今壁際でふるふる震えてこちらの様子をうかがう魔術師と二人だけで十分だったのに、ランスとエセルも最後だからと立ち会うと言い出した。
邪魔しないのならという条件で、立会いを許した。
そのため、当初立ち会う予定だった国王は、あまり人がいても集中力を損ない邪魔になるだけと辞退した。
まったく、どこかの誰かさんたちは、その理性と判断力を見習うべきよね。
ランスはどこからか無駄に細工が緻密な白木の椅子を持ち出し、そこに腰かけ優雅にワイングラス片手に送還の儀を見学。
エセルも、一年を少し前にしてようやく見つけ出した、唯一送還の儀の方法を記す魔術書の頁と魔術師の手順を見比べ、満足そうにうなずいていた。
そうして、二人が見守る中、送還のための魔術師長の呪文が唱えはじめられる。
呪文がすすむにつれ、幾重にも重なった魔方陣から徐々に光があふれてきた。
いよいよわたし自身もそのまばゆい光につつまれようとした時だ

った。
「……あ、やっちゃった」
張り詰めた緊張の糸をぷちっと切るように容易くもれたつぶやきとともに、わたしをつつんでいた光がふっとかき消えた。
何事かと言葉を発したランスを見ると、あははーとどこか気まずそうに愛想笑いを浮かべ、ついで魔術師長を見やるとどこかひきつった顔をしていた。
そうして、とてつもなく嫌な予感がして、ゆっくりと足元へ視線を移していくと、そこに描かれているはずの魔方陣がなかった。正しくは、その一部が欠落していた。
たしかに少し前まではランスの手に持たれていたはずのグラスが、そこに力なくころんと転がっている。
転がっているだけでなく、その中に入っていただろう真紅の液体が、ものの見事に、魔方陣の欠落した部分にこぼれている。いや、こぼれた赤い液体が、魔方陣の一部を消している。
急に光が消えた理由を悟る。
「あー、魔方陣、消えたなあー」
しかも、のんびりと悪びれることなく、同様にそれを見たランスがつぶやく。
怒りがぼんと湧き出たけれど、それよりも今はこちらの方が大切。
お馬鹿ランスなどより、わたしの帰還！
魔方陣が消えたとしても、幸い、それを記した唯一の魔術書をともにここにいるエセルが持っている！
それをもとに、魔術師長に魔方陣を描き直してもらって、再び呪文を唱えてもらえば、うん、わたしは元の世界へ戻れる！
そう思い、期待に満ちた目を魔術書を持っているエセルへ向ける。
同時に、わたしの目にとんでもないものが飛び込んできた。
床においた燭台の上に、あろうことかその魔術書がエセルの手からすりぬけ落ちていく。
何故か、魔術書を持っていたはずの右手は、すすんで落としまし

たとばかりに、わたしに見せつけるように手のひらをこちらに向けている。
「おや？　燃えてしまいましたねえ」
エセルは焦った様子なく燭台の上から魔術書を持ち上げると、かざすようにそれを見て、のんびりのたまった。
しかも、狙ったかのように、召喚に関する、しかも送還の儀の魔方陣に関する頁のみが燃えている。その頁のみ跡形もない。
エセルの足元では、火が消えた燭台が、ぽてんと転がっている。
「いぃーやぁー！！」
それを目にし、瞬時に頭の中でそこから導き出されるものを理解すると同時に、わたしはこの世の終わりのような雄叫びを上げていた。
「レイナ、落ち着いて」
なだめるように言いながら、ランスが椅子から立ち上がりわたしへ歩み寄ってくる。
ついで、エセルが魔術書を興味ないとばかりにぽいっと放り捨て、やっぱりわたしに歩み寄ってくる。
「落ち着いてですって！？　これが落ち着いていられますか！　信じられない！　なんてことをしてくれたのよ、あなたたち二人は！」
「レイナ、うるさい。もう少し声量を落としなさい」
眉根を寄せながら、その言葉通りにエセルが耳に手をあてる。
「黙れ、この鬼畜宰相！　あなたたち、何をしたかわかっているの！？　あり得ない！　これって、もしかしなくてもあれでしょう、わたし、もう二度と元の世界に還れないということじゃない！　何してくれやがっているのよ、この迷惑の権化どもが！」
歩み寄ってきたランスとエセルの胸倉を、それぞれ片手ずつでつかみあげ詰め寄る。
すると、二人とも実にむかつくくらいスマートにその手を解きとり、そのまま包み込むように握り締める。
わたしの手をとったまま、二人はその場に跪いた。

うっとりするほどに艶かしい微笑を浮かべ、二人は同時に熱くとろけるように告げる。
「レイナ、私と結婚しよう」
瞬時にわたしの思考は、地球を百億周くらいしたと思う。
だから、何がどうなったら、そうなるの！？
――そうして、現在に至る。
そう、今いちばん問題なのは、この馬鹿二人が邪魔してくれたおかげで、わたしは元の世界に還る方法を失ったということ！
「とりあえず、あなたたち二人は後でお仕置き決定。そしてすぐに、他の帰還方法を探し出して！」
不満そうに見つめるランスとエセルをびしっと指差し言い放つ。
すると、ランスは微苦笑を浮かべ、エセルは面倒くさそうにため息をもらした。
「無理だな」
「ええ、無理ですね」
「どうして！？」
ゆっくり立ち上がる二人をにらみつけると、ランスが肩をすくめて、ちらっと背後に視線をやる。
「だって、ほら……」
ランスの視線の先を辿っていくと、そこには――。
「魔術師長！？」
痛ましそうにわたしを見つめ、静かに首を横にふる魔術師長がいた。
そ、そ、そんな……。
それはつまりは、魔術師長をもってしても、他に方法はないということ？
なんてこと……。
こんな馬鹿なことがあっていいの？
馬鹿な理由で、わたしは帰還手段を永遠に失ったというの？
あ、あり得ない。

まるで錆びた機械人形のように、ぎぎぎぎと音をたて、再びランスとエセルに視線を戻す。
きっと、わたしの目には今にも零れ落ちそうなほど涙がたまり、顔は色を失っていると思う。
すがるように、それでも最後の望みをのせて二人を見つめる。
すると、二人はほわりと頬をゆるませた。
「諦めて、この世界で私の妃になれ」
「いいえ、私の妻になりなさい」
そう言って、ランスはわたしの右手の甲に、エセルはわたしの左手の甲に、愛しげに唇を落とす。
だから、何がどうなって、そういうことになるの！？
一体、わたしに何の恨みがあるというの！？
しかも、仕舞いには、二人そろって求婚ですって！？
あり得ないから！！
わたしの帰還の邪魔をしたばかりでなく、そんな脈絡のないことを言って、わたしを混乱させるなー！
もう、本当、何がなんだか……。
とりあえず、わたしはもう元の世界には還れない、ということだけは間違いないの？
嗚呼、この馬鹿ども、一生許さないから、恨んでやる、呪ってやる！
そして、仮にこの世界で生きていかなければならなくなったとしても、天地がひっくり返ろうとも、この二人の求婚だけは絶対に受け入れない。
これ、決定事項！
そうかたく決意し、恨みと憎しみをこめて、ランスとエセルをぎろっとにらみつける。
にらんでいるのに、何故かわたしの黒い瞳に姿が映り嬉しいとばかりにゆるやかな笑みを浮かべるランスとエセルを突き飛ばし、そのままこの白い広間の扉へ駆けていく。

「絶対に方法を見つけて、還ってやるんだからー！」
そう叫びながら勢いよく扉を開き、広間を飛び出した。
どうしても還ることができないというのなら、今は一秒でも長くこの場にいたくないし、二人の顔も見たくない。
それに、わたしはまだ諦めないからね。もう誰も頼りにならないなら、自分で還る方法を見つけ出す！
だかだかと乱暴な足音を響かせ、わたしは白亜の神殿の内廊をかけていく。
広間に取り残されたランスとエセルがあっけにとられつつも、走り去るわたしを微笑ましく見送る。
「わかっているだろうな、魔術師長」
「レイナにうるうる瞳で上目遣いにおねだりされても、絶対にお願いをきいてはいけませんよ」
「魔術書などなくとも、？あれ？ならば、今すぐにでも送り還せることは、レイナに？だけ？は秘密だからな」
「レイナを騙して、せっかく一年ひきのばしたのですから。今後も気づかれてはなりませんよ。勝負はまだまだこれからなのですから」
真っ黒い笑みを浮かべ、二人がかりで魔術師長を脅していることなど、当然神殿の外へ駆け出したわたしが知る由もない。
そうして、今日もわたしは、異世界という名の鳥かごにとらわれたまま。

3．それはまるで狂気　：　ランスロット視点

深く澄んだその黒い瞳を目にした瞬間、心を奪われた。

＊

それは、毎年繰り返される、すでにまんねりしていた誕生日式典を締めくくる儀式の最中だった。

いくつもあるもののひとつ、大神殿の祈りの間で、天の国に住むという神々に祝福を乞う儀式。

別に天の国やら神やらを信じているわけではない。

ただ、昔からそういう習慣なので、私もあくまでそれに倣っているにすぎない。

もう聞き分けのない子供ではないし、この程度のことならば、まわりが望むよう流されてやることがいちばん面倒がなくていい。

このようなわずらわしい式典も本来ならば必要ないが、やはりそれも古来よりの慣わし。望む者が多いならば、つき合ってやることがいちばん楽でいい。

そのようなどうでもいい気持ちで、けれど表面上は真摯に取り組む姿勢を見せる。

それだけで、皆満足する。騙されているなどみじんも思わずに。

心の内は馬鹿らしいと、冷めていることになど気づいていない。

馬鹿馬鹿しいと思いつつも、儀礼にのっとり、差し込む陽光に両手を捧げた時だった。

祈りの間に突如閃光がはしった。

あまりのまぶしさのために目を細めたが、次に目を開いた時には、陽光をつかむようにのばした手の指の先に、ひときわまぶしい七色の光の球が現れた。

すぐに、その七色の光の中に信じがたいものを見つけた。

七色の光の中に、まるで胎児のように体を折り丸まる、黒髪が美しい少女の姿があった。
半ば呆然とその光景を見ていると、七色の光は、いや少女は、まっすぐに私の腕の中へ落ちてきた。
そうして、七色の光がおさまっていくと同時に、腕にしっかり人の重みを感じる。
油断なくしっかりと少女を抱え、様子をうかがうためその顔をのぞきこむ。
時を同じくして、少女の瞳がうっすら開かれた。
瞬間、私は少女のあまりにも美しい黒い瞳に、吸い込まれるように心奪われた。
私が腕に抱く少女は、天からの私への祝福の証の娘と、誰かが背でぽつりこぼす声が聞こえた。
けれど、その時の私には、そのような言葉はどうでもよかった。
私にとって重要なことは、腕に抱く少女の存在そのものだった。
その後、式典もそこそこに――まあ、もはや式典どころの状態ではなかったのだが――私は少女を腕にしっかり抱えたまま、そばに控えるエセルバートを連れて、人払いをした客室へ場所を移した。
王族の居住区となっている奥宮は、たとえ有力貴族であろうとおいそれと立ち入ることは許されない。
そこで、あえて奥宮に申し訳程度にある客室を選んだ。
客室に入り、そっと長椅子に座らせてもしばらく、少女は状況を理解できていないとばかりに半ば放心状態だった。
けれど、知らせを送った父上がやってくる頃には、少女もどうにか放心状態から抜け出していた。
どうやら少女は言葉が通じないようだったので、すぐに魔術師長のオズワルドを呼び、翻訳の魔術をかけさせた。
そうして、オズワルドを退出させ、父上もまじえ、少女と四人で話しているうちに、少女は女神の娘などではなく、何かの拍子に異世界より召喚されてきてしまった不運な娘だとわかった。

けれど、私にはそのようなものはどうでもよかった。関係がない。
今目の前に、たしかに少女――レイナがいるということだけが重要だった。
レイナはその後、渋りながらも、私たちが提案した王宮での滞在を受け入れた。
王宮内にある大神殿に現れたというなら、レイナを召喚した者は我が国の、しかも下手をすると王宮に関係する者かもしれない。
それはレイナに伝えることはなかったが、ならば、責任は我々にもある。
召喚術はその残酷さゆえ、非人道さゆえ、もう何百年も前に禁術とされている。
罪を犯した者は厳罰に処するため、今では行使する者などいないと思っていたが、救いようのない馬鹿はいつの時代にもいるらしい。
それも含め、国が責任をもって、レイナが元の世界へ還るまで世話をすることは当然のことだろう。
準備期間も入れほんの一週間程度の予定だったので、それも可能だった。
召喚術は禁術だが、魔力と知識があれば、さほど難しいものでもない。
実際、魔術師長のオズワルドは、問題なく扱える。
けれど、この時の私は、レイナを元の世界へ還してやる気などすでになかった。
どうやらエセルバートも同じだったらしく、この時ばかりは、普段何かといがみ合っている奴とも意見が一致した。
それに、現状、王宮からレイナの姿が消えることも好ましくなかった。
見られてしまったのだから。それも重臣と呼ばれる者たちばかりに。
レイナが現れた場所がまずかった。
よもや、貴族たちが集う私の誕生日式典の儀式中、しかも私の腕

の中だったのだから。
彼らはただそれだけで、レイナが女神の娘だと信じ込んでいる。
そのような状況の中でレイナを還したとなれば、この上なく面倒なことになるだろう。
私とは違い、この国の大半の者たちは神の存在を信じている。
恐らく、父上とエセルバートはそのような打算で、レイナをこの世界に、この王宮に引き止めたのだろう。
けれど、私は違う。
ひと目見たその瞬間、心奪われたのだから。
どこまでも無垢で澄んだ瞳の少女を、手に入れたい。
そのためならば、どのような非道な手でも使う。
人は、どのような状況下でも、かかわった時間の分だけ情がわくというもの。
できるだけ時間を稼ぎ、レイナの帰還を先延ばしにする。
その間に、少しでもこちらに未練が残るように。
そして、帰還が迫った頃には、思惑通り、気持ちの振り子が徐々にこちらへ向いていた。
レイナはまだ混乱から抜け切れないようだったが、話しているうちに夜も更けていたので、後は女官長のエイダに彼女を任せ、その夜はそのまま客室を後にした。
翌日にはレイナをこの世界へ召喚した魔術師が判明し、すぐさまエセルバートが秘密裏に処分した。
オズワルドに祈りの間にとどまる魔術の残滓を探らせると、犯人を暴くことなど容易だった。
けれど、この事実は公表することなく握りつぶした。
よって、レイナが神の娘などでなく異世界から召喚されたただの娘であると知る者は、父上、母上、オズワルドとエセルバート、そして私、他一部の限られた者だけ。
魔術師の供述によると、召喚理由は、高位の魔獣を召喚し使い魔にして、普段馬鹿にしている者たちを見返すためと、なんともふざ

けたものだった。
しかし、自らの力を過信したためか、力が中途半端だったためか、召喚はあえなく失敗。
そのために、果たして、時期と場所がよかったのか悪かったのか、レイナは私の腕の中に落ちてきた。
それが、今回レイナが召喚された顛末。

＊

あれは、レイナがこの世界にやって来てひと月ほどたった頃だろうか。
その頃には、私も、私たちも、レイナと大分打ち解けていた。
それは、多分に、レイナの気質が影響したのだろう。元来、前向きで我慢強く明るい性格をしていたらしい。
すっかり月が真上を越え西へ傾いた頃、長引いた執務をようやく終え、私室へ戻ろうとしていた時だった。
奥宮へ続く渡り廊下を歩いていると、夜の闇よりさらに深い、けれど月よりも輝く光を、視界の端にふととらえた。
はっとしてそちらへ目を向けると、部屋を抜け出したのだろうか、レイナが奥宮の外廊から中庭へ駆け出しているところだった。
月よりも美しくきらめく光は、レイナの艶やかな黒髪だったのだろう。
思わずその姿に見とれてしまったが、すぐに気づき、慌ててレイナを追いかけた。
背後で護衛のためついて来ていた近衛が何かを言っているようだったが、目線だけでついてくるなと厳命を下す。
レイナを見失わないよう、けれどレイナに気づかれないようその後を追うと、レイナはすぐに立ち止まった。
かと思うと、ちょうど薔薇の垣の陰に隠れるように、すとんとしゃがみこんだ。

レイナに気づかれないよう、葉ずれの音をさせないよう注意を払い、ゆっくりとそこへ近寄る。
垣の上からのぞきこむと、レイナはそこにうずくまり声を押し殺し泣いていた。
瞬間、胸が張り裂けそうなほど痛む。一瞬、呼吸すら忘れた。
レイナがこうして隠れて泣く理由など、すぐに知れる。聞かなくともわかる。
元の世界が恋しいのだろう。元の世界へ還りたくて仕方がないのだろう。
けれど、どれほどレイナが嘆こうが苦しもうが、もう私にはレイナを元の世界へ還してやる気などまったくない。
ゆっくり垣をまわり、小刻みに震えるレイナの肩を背から抱き寄せる。
すると、この時まで私の気配に気づいていなかったのだろう、レイナは大きく肩を震わせた。
そして、ばっと顔をあげ、そこに私の姿を認めると、まるで犯罪現場でも目撃されたかのように目を見開き顔色を失った。
拍子に、その黒く大きな瞳から流れていた涙も、驚きのためかぴたりと止まっていた。
誰にも知られないよう部屋を抜け出し一人泣いていたのだから、当然の反応だろう。
レイナは優しい。苦しんでいることを、まわりの者に知られないようにしたかったのだろう。
知られると、もれずまわりの者はレイナを案ずる。心を痛めることになる。
レイナはそれをさけたかったのだろう。だからこうして、人知れず夜の庭でひっそり涙を流す。
本当は、こうしてレイナの前に現れるべきではなかったのかもしれない。
けれど、一人泣かせることなど、私にはできない。

「……すまない、レイナ。どう声をかければいいのか、私にはわからないんだ。けれど、せめてこうして、抱きしめることだけは許して欲しい」
驚き言葉を失ったレイナの体を反転させ、その背をゆっくりとなでる。
そして、言葉のまま、一気にレイナを胸へ抱き寄せた。
レイナはまた大きく体を震わせ、私の胸の中で、腕の中で、逃れようとはかない抵抗をみせる。
けれどそれもすぐに諦めたように、そっと私に身を任せた。
私の胸に顔を押し当て、レイナは再び静かに泣きはじめた。
この瞬間、まるで私はレイナにとって特別だと言われたような気がした。
誰にも知られず一人苦しみに耐えるレイナが唯一すがる者、それが私だと言われたような気がした。
胸に甘いうずきが広がる。
――泣くといい。気が済むまで泣くといい。涙がかれてなくなるまで泣くといい。
それだけで、レイナが私のそばにあるのなら。
レイナを苦しめることになってでも、私はレイナがそばにあることを望む。
残酷だと、自分勝手だと自覚はある。けれどそれでも、この望みだけは譲れない。
そう、悲しみのあまりレイナが壊れることがあっても、私は変わらずレイナをそばにと望む。
許してくれとは言わない。
レイナをこの世界へ召喚した魔術師よりも非道なことをしているという自覚はあるから。
そうして、東の空が白くなるまでずっと、レイナを胸に抱き続けた。
王宮が起き出す前に、泣きつかれてようやく眠りについたレイナ

を部屋へ運び、寝台に寝かせる。
そしてそっと、レイナの泣きすぎて赤くはれたまぶたと額に口づけをひとつずつ落とす。
呼んだレイナ付の侍女には、レイナの目元に濡らした布を、そしてレイナが起きるまで寝かせておくように言い置いて部屋を出る。
その日の昼過ぎ、レイナは遠慮がちに私の執務室へやって来た。
泣いた名残は完全になくなることはなく、まだその目元は赤くわずかにはれている。
けれど、化粧をすれば誤魔化せる程度には落ち着いている。
やって来たレイナは、ちらちらと視線をさまよわせ、そわそわした様子で、ぶっきらぼうに、「昨日はごめん。ありがとう」と言い放って、そのまま逃げるように廊下の向こうへ駆けて行った。
その顔が真っ赤に染まっていたことを、私はよく覚えている。
また、あまりの愛らしさに、しばらく頬がゆるんでいたことも。
レイナは本当、なんとかわいい生き物なのだろう。
祈りの間で心奪われてから、日々、レイナへ寄せる私の思いは大きく膨れ上がるばかり。
書類を持って来た侍従が、そのような私を見て、不気味そうに身震いしていた。
その後、その侍従には、しっかりと制裁――教育的指導を施してやった。

＊

本当は、レイナを元の世界へ還すための準備期間など必要ない。
レイナをこの世界へ召喚した魔術師を捕える必要すらなく、その気になれば、それこそ、レイナから事情を聞いた時点で、レイナを送り還してやることは可能だった。
そう、いつでもレイナを元の世界へ還してやれる。
召喚術はその残酷さから禁術となっているが、力のある魔術師、

魔術師長級の者ならば問題なく行える。
けれど、私にはレイナを返してやる気などまったくなく、またまわりの者たちも望んでいないため、その事実を誰一人としてレイナに伝える者がいないというだけ。
そのため、レイナはいまだに、元の世界へは還られないと思い込んでいる。
恐らく、私だけでなく、レイナをひと目見たその時から、誰もがレイナをこの世界にとどめたいと望んだのだろう。
だから、何の打ち合わせもなく、私も父上も、エセルバートですら、あのようなでたらめをレイナに吹き込むことができた。
神の娘などでなく、ただ純粋に、レイナという存在に、皆惹かれたのだろう。
少しかわいそうな気もするが、レイナをそばにおいておきたい、手に入れたいという思いの前では、そのようなものは塵も同然。
たとえレイナを悲しませることになったとしても、レイナに事実を告げる気はない。
また、伝えようとする者がいれば、容赦なく排除する。
あれから一年たった今なお、レイナは神の娘と信じられたままなので、私の妃として迎えることに反対する者などいない。むしろ、望まれている。
仮に私の妃とならなかったとしても、本当に腹立たしいことにそうならなかったとしても、どうにかして神の娘をこの国にとめおきたいと皆望んでいるため、エセルバートでも誰でもよいから、レイナをとにかく誰かと結婚させ逃げられなくさせたいと思っている。
まあ、それが、今回、レイナがこの世界から逃げられなかった一端を担ったのだけれど、やはり彼女に伝える必要はないだろう。

＊

レイナの帰還を邪魔して一週間。

当初はあれだけ怒っていたにもかかわらず、単純なのか、それとも忘れっぽいのか、いや、自身の中で折り合いをつけたのだろう、レイナは今ではすっかり送還の儀以前と変わらぬ様子に戻っている。
今はまだ、そう振る舞っているにすぎないだけかもしれないが。けれどそれも、時が薄れさせるだろう。
退屈を持て余した頃、レイナは「邪魔してやる」と私の執務室へやって来る。
そして、執務机の前におく長椅子に座り、ぶーらぶーら足を揺らしながら、書類に筆を走らせる私に、散々エセルバートの悪口を吹き込む。
もともとは、執務机の前に長椅子などなかった。
けれど、レイナがここを訪れるようになった頃から、そこに長椅子を置くようになった。
その理由に、レイナはきっと気づいていないだろう。
もっと近くにレイナを感じ、声を聞いていたいという、そのような私の望みからそこに置くようになったことなど。
そして、レイナは「邪魔してやる」とその気まんまんでここを訪れるが、まったく邪魔になどなっていない、むしろ私に鋭気を与えることにも、きっと気づいていない。
別に吹き込まれなくとも、エセルバートが至上最悪の鬼畜野郎ということくらいわかっているけれど、そのかわいらしい声を聞くことは悪くない。
ただ、内容がエセルバートのことばかりということが面白くないが。
まあ、どのような内容であっても、レイナが私の元へやって来る。そして、一生懸命に私に語りかける。
その事実が、何よりも大切で喜ばしい。
「ランス、悪い顔をしている。……何かあった？」
思わず口の端でも上げてしまっていたのだろうか。
得意げにエセルバートの悪口をつらつら並べていたレイナはふと

口をとめ、長椅子から立ち上がり、とてとてと私へ歩み寄ってきた。
怪訝な表情を浮かべ、私の顔をのぞきこむ。
突如書類との間に現れたレイナの愛らしい顔に驚きそうになったけれど、何事もなかったようににっこり微笑む。
「何でもないよ、レイナ」
「ふーん。別にいいけれどねえ。でも、あまり悪いことばかり考えていると、そのうちエセルみたいにここに皺がよるわよ」
エセルバート同様信用がないのか、納得がいかないと言った様子で、レイナはつんと私の眉間をつく。
思わず、目を見開き、レイナを見つめてしまった。
レイナの何気ない仕草が、愛しくてたまらない。
レイナの指が触れたそこが、熱を帯びる。
胸が、幸せだと、悲鳴を上げる。

＊

これは、私のわがまま。
レイナを苦しめるとわかっていても、どうしてもやめることができない。
今すぐ元の世界へ還してやることは可能だけれど、私の心がどうしてもそれを受け入れない。
あの日、あふれんばかりの光とともに私の腕の中に落ちてきた時から、どのような卑怯な手段を使ってでも、レイナを騙してでも、たとえレイナに耐え難い苦痛を与えることになったとしても、レイナが欲しいと願ってしまった。
狂わんばかりに嘆き帰還を求めても、レイナを手放す気などない。
それはまるで、狂気。
レイナをこの国にとどめ、そしていつか手に入れるためになら、悪魔にでも魂を売り渡す。
……きっと、私は狂ってしまったのだろう。

レイナただ一人を欲するあまり。
レイナだけが欲しい。それ以外は何もいらない。
レイナさえ私とともにあれば、私は正気をたもてる。
狂おしいほどに、レイナが愛しい。
絶対に、元の世界へ還してなどやるものか。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9834z/

とらわれの姫君

2012年1月2日00時49分発行